

令和7年度 北九州市高齢者支援と介護の質の向上推進会議

介護保険に関する会議 会議録

1 開催日時

令和8年2月6日(金) 18:30～20:00

2 開催場所

北九州市役所本庁舎 3階特別会議室A

3 出席者等

(1) 構成員(10名/13名)

井上構成員、古島構成員、下河邊構成員、曾我構成員、中野構成員、野村構成員、橋元構成員、廣滋構成員、牧村構成員、渡辺構成員

(2) 事務局

保健福祉局長寿推進部長、介護保険課長、介護サービス担当課長、長寿社会対策課長、地域支援担当課長、認知症支援・介護予防課長、地域医療課長、地域リハビリテーション推進課長

4 議事内容

(1) 「北九州市しあわせ長寿プラン」の進捗状況について …… 資料1

(2) テクノケア北九州について …… 資料2

(3) 介護保険の実施状況について …… 資料3

議事(1)「北九州市しあわせ長寿プラン」の進捗状況について… 資料1

(事務局)議事(1)について資料1に沿って説明

(代表)

「北九州市高齢者支援と介護の質の向上委員会」というのは大きく分けて4つの委員会に分かれていて、「北九州市しあわせ長寿プラン」は3本柱で運用されており、介護保険に関するものは3番目の「選べる自由が感じられる多彩なケア」というところの項目です。介護予防とかいろんなものはまた別の委員会で検討されているということをまずご理解いただきたい。

今事務局から説明があったように、キーワードが「安全・安心・自己決定」という目標のもとにいろいろなものが催されているということですので、議論もその点に集中するかと思いますが、構成員の皆さんで何かご質問ございませんか。

(構成員)

終活あんしんセンターのお話ですが、私が勤務する施設で春に入所者の方とご家族と一緒に聞いてもらう家族会を予定しており、終活あんしんセンターに出前講演をお願いしております。今おっしゃられたように非常にスケジュールが詰まっているとのことでした。先ほど相談件数が500件というお話がありましたが、非常に関心の高いテーマだなと思いました。これからとても大切な課題だと思いますので、この取り組みはこれから益々必要になってくるのだらうと思います。

(代表)

他にございませんか。

(構成員)

終活事業者の紹介というのはどうやってやられているのか。

(事務局)

利用者さんがこの事業者にも頼んでも大丈夫だろうかというようなこととか、全国的にトラブルがあったりとかということで、国も動いているがまだ所管省庁が決まっていななどの状況はあります。

まずは、国がいま終活サポート事業者向けのガイドラインを出していて、その中で

契約にあたっての必要な説明項目を定めたチェックリストみたいなものが作られています。

それをもとに、これは社会福祉協議会さんが実施している事業ですが、各事業者さんにきちんと同意をしてもらって、トラブルがあった場合の責任者を決めていただき、市においても必要に応じて消費生活センターにも協力をしてもらおうよう連携を図っております。現在14社ぐらいに終活を応援・支援するサポーターとして社会福祉協議会に登録をしているというのが現状でございます。

(構成員)

後見センターで亡くなられた方の後の死亡事務というものがあって、事前にある程度やっていただいとあとの方は非常に助かるだろうと思うが、弁護士会の法律相談とかで聞く話だといろいろと問題がある事業者もいると聞きます。社会福祉協議会が、紹介できる事業者をどうやって選んでいくかというのもなかなか難しいと思う。

(代表)

他にございませんか。

先程、構成員から質問がありましたが、思った以上に終活に関する出前講演の回数が多いとのことですが、例えば講演に参加する対象者というのは高齢者が多いでしょうか、ご家族が多いでしょうか、それとも事業者でしょうか。

(事務局)

やはり高齢者の方が多いですが、子どもさんにも言わずにこっそり来たとか言われる方も結構おられます。今後は、お子さんと親御さんが一緒に来られるなど、幅広く啓発を進めていきたいと考えております。

(代表)

終活という言葉からすると何となくネガティブなイメージもなきにしもあらずなんです。

最近の話題になりますが、リハの最近の考え方で「リエイブルメント」という言葉があります。有用な生活、価値ある生活を取り戻そうというような意味ですが、そういうことをリハの立場から対象者の方に説明したら、私はもう終活していますから、もう年賀状も全部お断りしますからというような、そういう何かネガティブな感じを市民

の人たちが持つようなこともあるのではないかと思います。

(事務局)

終活というとそういうイメージがあるので、社会福祉協議会さんが作っているエンディングノートも、「エンディングノート」という名前ではなく「私のこれからノート」ということで、いかに今からを自分らしく生きていくか前向きに書くということで、これは医師で作家の鎌田先生なども推奨されております。北九州市でも前向きな活動として進めていきたいと考えております。

(代表)

本来、終活はそういうネガティブな意味ではありません。この表題にもありますように、年を取っても安全に安心して暮らせる環境づくりということに結びつけるということです。

先日もあるお寺の納骨堂に行きましたら空きがありました。だんだん次世代の方たちがもう関与しないようになってきているというようなことをその住職が言っていました。かといって連絡しても全然連絡がもう戻ってこないという、そういう時代になっていることも事実だと思います。

他に、「北九州市しあわせ長寿プラン」進捗状況についてごぎいませんでしょうか。

(構成員)

ここに来て初めて終活あんしんセンターというのがあると知って、すごくいいなと思いました。

何となく皆さん不安に思いながらも、どこに持っていったいいのかというのは多いと思います。具体的に相談を受けてもらえそうだし、ネガティブなイメージをこういところから変えていってもらえればいかなとすごく期待しています。

(事務局)

終活あんしんセンターは社会福祉協議会さんが運営しているので、普段の相談では社会福祉協議会の職員の方が相談に乗っています。まず初めに自分がどうしたいかなどの相談を社会福祉協議会の方が対応するので、来られた方は安心して相談ができるということでした。まずは心配せずに相談ができるという安心をお届け出来ると思います。

あとはそれを踏まえて、どういうところを選ぶかというところはお自分のご希望で

考えていただくというような形で今進めているところです。

(代表)

ありがとうございます。何かご意見ございませんか。

(構成員)

実は私が理事をさせていただいています高齢社会をよくする女性の会でも、終活をテーマに数回講座みたいなのを開催いたしまして、やはり皆さんご興味がある分野かなと思います。

先ほども代表からお話がありましたが、終活というのはあくまでも死のための準備ではなくて、そこに向かうための自分がどう生きるかという準備だなとつくづく思います。

終活ということにとらわれず、どう生きていくか、年齢ではなくその方の状態のステージに合った、やはりQOLを上げるというところがあると思うので、終活の窓口にくられた方でも、いや先にこの方は予防が必要よねとか、やはりもう介護保険の説明をした方がいいよねというような、何かワンストップ窓口みたいなものもあるといいなと感じました。以上です。

(代表)

ありがとうございます。

グループホーム協議会等で終活というのはご議論されたことございますか。

(構成員)

私の知っている限りはないです。ご存じのようにグループホームはもう看取りがいま普通になってきています。

よく相談を受けるのは葬儀のこととか、ご家族が遠方にいるとか、葬儀会社とかもまだ決まっていないとか、墓終いのこととなると宗教によっても違って来るでしょうし、僕らでは相談を受けても答えられないのが現状で、こういったところがあって僕ら自身も勉強する必要があると思います。

出前講演みたいなもので介護事業者を集めて何かアドバイスをもらえるような仕組みができれば事業者としては相談に乗りやすいし、また最後のエンディングまでちゃんとアドバイスできるとなると利用者も安心されるのではないかと感じました。

やはり何も知らないよりも、少しでもアドバイスをして、或いはこういったセンター

もありますよとすることができる。新聞ではこういうのをよく見ていたが、実際にそういった活動がもう始まっているということを知って非常に心強くなりました。

(代表)

他に何かご意見ございませんか。

(構成員)

老いを支える北九州家族の会では「私を知ってっちゃノート」というのを作っていて、エンディングノートとちょっと違いますが、自分が認知症になったり意思が伝えられなくなったときにどう生きていきたいかというノートです。

いま最後の人生会議というのがあちこちで討議されていて、どう生きていかどう最後を迎えたいかということはやはりどうしても考えないといけないことです。

それは最後になるまで結論が出なかったり、家族によっていろいろ意見があって統一できなかったりといろいろとありますが、こうやって資金のない方たちも相談できるような体制ができてすごく心強いと思います。

(代表)

ありがとうございます。

我々部会の一番大きな柱となっている、「選べる自由が感じられる多彩なケア～安全、安心、自己決定～」ということで事務局から報告いただきました。

この3年、概ね予想以上の成果を上げてきているということが実感される現状ではないかと思います。

それでは次の議題で、昨年度リニューアルしました「テクノケア北九州」について、ご説明をお願いします。

議事(2) テクノケア北九州について… 資料2

(事務局)議事(2)について資料2に沿って説明

(代表)

「テクノケア北九州」のリニューアルというよりもリボーンという、生まれ変わった施設というイメージが非常に強いですが、いくつかのキーワードを含めてご説明いただきました。その中でも産学官連携というか、ユーザーを入れた産学官民連携というようなことも強調されているかと思います。

構成員の中で何かお聞きしたいことはございませんか。何より一見は百聞に如かずで一度見るのが一番いいかと思います。決してロボットありきではないということのようです。

(事務局)

今回暮らしということに着目していますので、その中にいろんなテクノロジーを使って、どうすればその人らしい暮らしができるのかというところにコンセプトがあります。

ICT機器というのは本当にちょっとしたところで身の回りにいっぱいあるもので、まだまだ我々触れていないところもありますので、そういった面では代表が言ったみたいに一度来ていただけたらありがたいなと思います。

(代表)

専門職等に対する教育といいますか研修ということにも力を入れているようですがその点補足いただけますか。

(事務局)

研修・講座ということで簡単に説明させていただきましたが、一般の方に限らず当然専門職向けの研修カリキュラムを全部含んでおります。

それぞれ専門職に対してどういうふうな機器を使ってフィッティングしていくとか、様々なテーマを取り入れていきたいと思っていますので、幅広く一般の方から専門職、それから施設の方にも研修材料として提供していきたいと考えております。

(代表)

他に何かご質問ございませんか。

(構成員)

質問ではないですが独り言のようにちょっとチャッピーに相談いたしまして、北九州市の高齢者施策はどうなっているのと聞きましたらとても評価良くて、北九州モデルを初めとして地方自治体の中ではトップランナーであるという答えをいただきました。

今ご説明があったように、超スマートケアコンソーシアムも見どころがあるような内容であるということで、とても一般市民としては心強く、楽しみにしております。

その中でやはり産学官というお話がありましたが、企業さんはいろいろロボット等でお話があると思いますが、もっと大学の能力というのを信用して大学の能力を引っ張り出していただければ、もっと楽しみがあるのかなと市民として思うところです。

幸いにして北九州市はいろんな特徴的な大学、医学に始まり介護福祉リハビリテーション、それから地域コミュニティ、これ人種を超えたコミュニティもありますし、体力スポーツ等々の専門分野もある。そういう意味ではとても北九州市民としては心強いところもありますので、もう少し大学を引っ張り込んで活力溢れるような市にしていいただければありがたいと思います。

(代表)

いま大学の連携という話がありましたが、実は別の分野で北九州にあります大学はいろんな分野で連携して動くプランニングが進んでいます。

たとえば就活で地元に着するようなことを、1大学だけではなくていわゆる北九州市全体の大学が連携して推進していこうじゃないかというようなアクションが進んでいます。やはり学生人口が減っていますのでそういう働きかけもされています。

テクノセンターの展望等含めて何かご意見ございませんか。

(構成員)

オープンしたときぜひ見学に行きたいなと思ったのですが、まだ行けていないので学生などを連れていきたいなと思います。

このテーマの中で、テクノケアはこれから時代とともに発展していくと思いますが、一方で私の身近な存在で高齢者としていらっしゃる方々がちょっとテクノロジーに置いていかれるのではないかという、その不安もあるのかと思います。

スマートフォンもそうかなと思いますが、身近にネットを使わないといけなくなって、便利ですが馴染めていない方々が馴染む機会も提供していただいて、ハードルが下がるような形の事業展開もしていただけたらいいかと思います。

(事務局)

おっしゃる通りだと思います。実はここ北九州市内1ヶ所で、ここに来ないとできないというのは確かに北九州市広いエリアではありますので、いかに広報で知ってもらえるのかが大事だと思います。

そういった面では出前講演なども来年度拡充しようと考えておりますので、ぜひ外に出向いて、いろんな体験ができるとかそういったものも考えていきたいと思っております。貴重なご意見をありがとうございます。

(代表)

他にご質問ございませんか。

先ほども言いましたように、いわゆるリニューアルという考えよりも新しく生まれ変わった、新しい時代に共創という言葉を使って作り上げていくというクリエイティブな面も含まれているわけですから、よろしく願いいたします。

それでは議題3番目に本委員会の一番メインでもあります介護保険の実施状況について事務局ご説明をお願いします。

議事(3) 介護保険の実施状況について… 資料3

(事務局)議事(3)について、資料3に沿って説明

(代表)

介護保険と一口で言っても、対象者の問題、お金の問題、あるいは介護者・人の問題と様々です。現状からみた場合、高齢者が増えていっている。この資料の3ページにもありますように加齢とともに要介護リスクが急上昇しています。65歳以上を同じ高齢者と言っても、実は介護保険の利用登録というのは10年ごとで大きく違ってきている。65歳から74歳の方は5.4%、75歳から84歳の方でも2割強、現状からみると介護保険の利用者で非常に率が高いのはやはり85歳以上の方です。

高齢者でいろいろな取り組みをするといっても、今後はやはり年代等を含めて考えていかなければいけないのではないかとということが示唆されるデータかもしれません。

それから従来から日本では介護と言えど何となく古いですが女性が主体になってきた。最後のデータから見ましても登録者の8割が女性ということが現状として現れているのではないかと。そういう面も含めて、何かご発言ございませんか。

(構成員)

介護保険制度が始まった頃と比べて、随分ご利用者の空気が変わってきたように感じます。といいますのが、以前はほとんど女性の方ばかりでした。それが最近では、半数まではいきませんが4割ぐらいは男性のご利用者が増えております。それだけ介護保険が始まったことによって介護の社会化が進んできたのだらうと思っております。

ただ、このデータでもお話がありましたように介護人材が本当に足りなくて、今私たちも外国人に頼るようなことが増えております。

やはり同性介護というのが必要なので、介護を男性ばかりにするわけにもいきませんし、その比率というのもあります。年齢が高くなるとなかなか重介護ができなくなるということもありまして、機械を使いたいけれども年齢の高い職員はテクノロジーに弱いとか、今一番私たちの現場では過渡期にあるのかなという気がしております。以上です。

(代表)

入所者の平均年齢は何歳ぐらいですか。

(構成員)

男性だと80歳ちょっと位です。女性はもっと高いです。そんなに日本の平均とあまり変わらないかなというのがありますが、100歳以上の方も施設で、2、3人いらっしゃいます。

(代表)

入所期間はいかがですか。以前に比べて長くなっていますか、短くなっていますか。

(構成員)

以前に比べて短くなっています。以前は大体5年10年といらっしゃいましたが、今の平均だと多分2年位でしょうか。要介護度が高くなって入所されることが多いので、特別養護老人ホームに限って言えば入所期間は大層短くなっています。

(代表)

もう1つ、以前に比べて待機する期間、申し込んでから入所できるまでの期間は以前と変わりませんか。短くなっていますか。

(構成員)

それはもう圧倒的に短くなりました。といいますのが、やはり今入所判定会議というのが功を奏したところもあるのですが、いろんな形の施設が増えているので、特別養護老人ホームでないと最後まで迎えられないというところが減ってきています。

ユニットに関して言えば待機者がいないというのが現実です。

(代表)

そういうような状況を踏まえての話し合いになると思いますが、構成員の方でお聞きしたいことございませんか。

(構成員)

事業者の立場からこの数字を見ますと、6ページの上の段のデータを見ますと、例えば訪問介護が令和元年から令和7年で19件少なくなっています。

これは訪問介護ひとつとっても事業経営が非常に厳しくなっているというのが現実でありまして、今年の1月に東京商工リサーチが出したデータで確か176件の介護

事業者が倒産したというのがあって、そのうちの大体6割近くがこの訪問介護、そのほとんどはもう破産をしてというのものもあるし、人手が足りないというのがあったりします。

そこでこの19件というのを見ますと、事業者連絡会の1月の幹事会でもこうした倒産件数のことが非常に話題になっている。訪問介護が減っていくと在宅を誰が支えていくのかというような話になってきていますので、ここは非常に厳しい数字が出ているのかなと思いました。

それともう1点。4ページの上の要介護の認定率です。今年からどんどん右肩上がりで2035年までの10年ぐらいの間にどんどん上がっていくのですがそこからピークアウトして下がってきます。

実はこれは老建の話でもあるし事業所連絡会の話でもありますが、施設の建物が非常に古くなってきています。大体、建築関係で言えば25年から30年経ったら老朽化と言われておりますが、老健施設の北九州の調査をしますと30年以上経っている施設というのが60%以上になってきています。

今から建替えや改修をやろうというふうになってはいますが、非常に今資材費が高くなってきていて、それでも借金を抱えて今からやろうかと言っても、10年ぐらい経ってピークアウトして来たら返済をどうするかという話もあります。大体銀行から20年くらい借りて返済していきます。それからすると建替えをしても先が見込めないとなったら施設系もやはりどん詰まりになってくるのではないかと思います。こういう事態だということをよくご理解いただく必要があると思いました。

施設側や事業者側も何とか経営努力をやっていかなくてはならないのですが、この限界も来ているということも少しご理解いただきたいと思います。

(代表)

事業所自体の経営を含めたご発言だったと思います。他にご意見ありますか。

(構成員)

施設の老朽化はしみじみ感じます。やはり30年過ぎていますから本当にあっちもこっちも常にご注意くださいというような感じです。とても建替えとかというような余裕もないですし、この右肩上がりの増え方を見ると対応していけるのか心配になってきます。

(代表)

これは介護業界だけじゃなくて、医療業界の方がなお厳しいという現状があります。人の問題、そしてお金の問題というのはずっとついて回るのが現状です。

他に構成員の方からご質問等ございませんでしょうか。

介護保険というのがスタートして25年経って、最初からやはりお金の問題、そして人の問題が非常に厳しい状況であるということは間違いない。

北九州市ひとつとりましても、実は100歳以上の高齢者が、多分2年前で900人ぐらい、今は1,000人超えているだろうと思います。

そういう方たちを含めていわゆる団塊の世代と言われた我々が85歳にも手が届こうとしているときに、こういう問題は確実に出てくるかと思えます。

これは裏腹に考えましたら、介護保険の問題そのものよりもいかに介護予防事業を早期に始めていくかということと表裏の関係にあるだろうと思います。

実は北九州市は作業療法士の数が日本で一番多いです。理学療法士は全国で3番目から4番目くらいです。そのほとんどが病院、施設に勤めていますが、最近ではいわゆる介護事業所等に参画している有資格者が増えてきています。子どもの分野、放課後デイサービスとかそういう分野と、高齢者の介護予防に関する事業を展開している。そういうのを含めて何かお考えがありましたら。

(構成員)

先ほど代表が「北九州市高齢者支援と介護の質の向上委員会」は4つのセクションに分かれているということで、介護予防についてはまたその部門の中でのいろいろな検討がされているということだったと思いますが、そのバランスを確認していかないといけないなと思えます。

介護保険の話としては高齢者が増えていき、特に高齢化が進めば85歳以上の要介護率が高くなっているという現状がある。それを支える人がちょっと足りないという状況がある。

介護予防という意味で言うと、いわゆる今働いている方々がより長く体力維持できるように、もっと早い段階、65歳あたりかそのもっと前からアプローチをしていく。

また予防に関する仕事によって安定した雇用があって、支え手が増えていくというようなことが必要になると思えます。

なかなか1つのことをこうすればというわけにはいかないと思うが、対象者別に人材を配置していくということが求められるのではないかと思います。

(代表)

今のご発言の中で、いわゆる高齢者対象の介護予防ではなくて、やはり職域保健の中でどう展開していくか、学校保健の中でそういう概念をどう教育していくかということをもっと積極的に進めるべきではないか。

そういう意味で、北九州市が取り組んでいる「ゆめみらいワーク」への参画、「未来の介護大作戦」の中の催しをもっと積極的に展開していく必要があるのではないのでしょうか。

北九州市は元々福祉の都市と言われていまして、昭和の時代から障害者施策に始まって、昭和の終わりには日本で最初のモデル老健(介護老人保健施設)ができたところですし、九州リハビリテーション大学校や産業医科大学等、保健・医療・福祉が早くから連携していた歴史的な背景もあるところです。

そういうところでもっと有機的な連携が必要だろうと推測できるだろうと思います。事務局の方でご発言がございましたらどうぞ。

(事務局)

訪問介護の事業所数の減少というのは、やはり私どもも問題意識を持って対応しないといけないと思います。

今日資料としては用意しませんでした。毎年国が行っている介護サービス施設・事業所調査というのがあって、令和4年度に、国による三角形の図が出たスタートラインから令和4年度、5年度、6年度と分析を続けておりまして、おそらく北九州市では、常勤換算にするとどうかわかりませんが、人数は大体横ばいと考えています。

ただ高齢者が増えている分やはり繁忙感とか手薄感というのがあるのかなというのが1つと、その就業者自体の年齢が上がっていったということ。

また、要介護認定者も、例えば70歳で要支援2なのか、85歳で要支援2なのか、同じ要支援2でも介護の手間というか支援の度合いというのが変わってきますので、そういう部分の質的な変化は起きていると思います。

そこから先、こうすればということ何か知恵があるわけではありませんが、以前は厚労省の方がよく言っていた「2030年代が2040年代に向けた最後のきつい上り坂」は、最近聞きません。既に2025年で結構きつい坂じゃないかという気がします。

もしかしたら、要介護認定者のその中身の変化とか、働いている方の変化に伴って、やはりそこに必要な観点としてはICTを活用して、ICTのサポートのもとで仕事

の負荷は軽減しながら持続可能なものを目指していくというのは、必要なスタンスではないかと考えております。

(代表)

介護保険に関すると言えば、やはり負担と給付の問題、お金の問題というのをどう軽減していくか。また、外国人労働者、介護職を含めた人の問題をどう解決していくか。

ただ介護職を増やせばいいかというだけじゃなくて、私たち自身、自助をどう進めていくかということを含めて考えないと、公助ばかり、或いは共助ばかりに頼るわけにはいかないと思います。どう自助を進めていくか。

決して高齢者が多いということは負の財産ではないと思っています。北九州市の高齢化率が31.5%と言われていますが、これは逆の言い方をすれば歴史に基づいた、実績に基づいた財産で、それをどう活用していくかというのが今後の大きな課題でもあるだろうと思います。

一番の問題は、お金の問題、人の問題もありますが、それをどう運用していくか、マネジメントをどう進めていくか、これを考えていかないといけません。

古いことになりますが、介護保険というのは3Mと言って、お金の問題、それから人の問題、そしてマネジメントということが大きな課題となっています。

令和8年度、新しい委員会で再構成されていくということですけど、その点も含めて事務局からもしご説明されることがありましたら。

(事務局)

来年度のことではありませんが、先程言われた事業所の今の状況のことで、訪問介護の事業所が減っているということですが、確かにご心配などがあるかと思いません。

例えば同じ在宅サービスの中で最近訪問看護の事業者は逆に87も増えておりまして、やはりこれからの在宅生活で介護だけではなくて医療面という意味ではそういった状況があって少し手厚くなる部分もあります。

また、地域密着型サービスの中で定期巡回訪問介護看護は、住宅型有料ホームなどに行っていますが、そういった事業者が住宅型有料ホーム以外の周辺のところにもサービス提供をするといった働きかけをしております。先ほど代表が言われたマネジメントという意味で、いろんなサービスを組み合わせるということで限られた資源を有効に使っていくという点でも必要になってくると思います。

(代表)

他に何かご発言等ございませんか。

(構成員)

通所介護の事業所は数が増えてきて心配ないように思われているかもしれませんが、実は事業が駄目になってやれませんかという事業者もいます。他の事業者が引き継いでくれるから数は維持できていますが、本当のところを見ていくと辞めていくところが相当あります。幸い引き継いでくれるところがあるから何とかなっている。ほとんどは人手不足です。人が足りない。

また、この訪問看護が増えているのは、やはり見ていると最近自宅で死にたいという人が増えていると思います。昔はある程度重篤になると施設で亡くなる方が多かったように思うが、やはり家に戻りたい、家で死にたいと家に戻っているという現実がある。それに合わせて訪問看護がある程度増えてきてくれている。

(代表)

北九州はそういう非常にいい財産をまだ持っているとも言えると思います。

時間が迫ってきましたが他にご意見がなければこれで意見交換を終わりたいと思いますがいいいでしょうか。

(構成員)

今日初めて出席して非常に勉強になりましたが、ただ現場の状況を市の方にこういう機会だから知っていただきたいなと思って発言させてもらいますが、もう現状は老老介護です。

会社とかだと新陳代謝がありますけど、僕らの小さな事業所だともう定年になってももう少し頑張ってくれないかというのが現状で、今最高齢が78歳です。半年前に来た方が74歳。先週受けたいと言った方が68歳で若いという感じです。20代なんて全く来ていただけなくて、僕が入ったときは20代の方がいて各世代がいましたが、今一番若い方で38歳です。

やめないで欲しいというのを管理者側から今1人ずつ面談していますが、いつまで働いてくれるかということで、裾野も狭くなっています。

質的なものも、やはり訪問介護の人たちの話を聞いても高齢化しています。結構な高齢の方が家の方を回ったりしています。

いろいろ生産性向上とか、絵に描いた餅みたいな話が次々と来ますが、現状をぜ

ひ知っていただいた上で、こういった話をしていただけたら僕らもありがたいと思います。

(代表)

以前は老老介護と言えば家族間の老老介護ですけど、今は事業所所属でも介護支援している人自体が高齢者70代の方が関与しています。

(構成員)

介護の世界だけじゃないんです。他もみんなそうですよ。

(事務局)

今日はいろいろとご意見いただきありがとうございました。事業者が少なくなったり、働いている方が実際高齢化してきているという問題があるのは、市としても感じております。

先ほど構成員からもお話があったように、今、少子高齢化ということで社会全体が高齢の方が増えていて、介護の業界だけではなく他のいろんな分野でも高齢の方にもお助けいただきながらやっていくということが、どうしても必要となっているところもあります。

その中で、ICTなどを使って業務の効率化や、若い方に介護の業界に来ていただくために、今までとは違ういろんな取り組みを行っているところです。

確かに厳しい部分もあるかと思いますが、皆さんの声を聞きながら、今後の北九州市での介護の状況が少しでも良くなるように取り組んでいきたいと思っておりますので、いろいろとご意見いただきながら、市が取り組むことにつきましていろいろとご協力いただきながら、一緒に取り組んでいければと思います。本日はありがとうございました。